



つぎの10年も 安心して過ごせる 美しい景観を

～ Promise of safe living ～

神奈川県横浜市青葉区あざみ野 4-25-1-1306

URL : <https://www.ralz-association.co.jp>

外壁打診調査・ガラス清掃を手掛けている『RALZ-Association』。特筆すべきは、通常は足場を組んだ上で行う高所作業を、ロープアクセス工法（無足場工法）で行う点だ。この技術を持つ会社は限られ、引き合いが多い。そんな同社を、本日は俳優の志垣太郎氏が訪問し、滝社長にその歩みなどを伺った。



interviewer

俳優

志垣 太郎

president



代表取締役

滝 和貴

Kazutaka Taki

神奈川県横浜市出身。3歳から父親の故郷・栃木県で暮らす。高校1年生時に横浜へ戻る。社会に出て、様々な職種を経験しながら将来を模索する中、ロープアクセスの仕事に出会う。2社に勤務し、外壁打診調査などの実績を積み、2018年11月に起業を果たした。上級外壁打診調査士の資格を所有し、正確な調査・診断に定評がある。

外壁の状態を正確に診断する打診調査で 安全性の確保に貢献していきたい

早速ですが、滝社長は、早くからビルメンテナンス業界を志していच्छったのですか。

いいえ、入るまでには、適性を見極めるために様々な職種を経験してきました。高校へ進学した時には、料理人を志していたんですよ。今とは、全くの異業種でしょう（笑）。私は横浜出身ですが、幼少期に栃木県へ引っ越しまして、栃木では父がレストランを経営しているんです。それで私も料理人の道へと、高校は卒業時に調理師免許が取得できる学校を選びました。ところが、高校一年生の時に横浜へ戻ってきて、高校も転校。同時に、進路も一から考え直すことになりました。

それで、様々な職種を経験してみられたのですか？

ええ。自分にどんな仕事がか合っているかわからないので、まずは色々な業界を見て回ろう、と思って。工場にも勤務しましたし、ファーストフード店でも働きましたし、ダクトや空調設備のメンテナンスにも挑戦しましたね。その中で、最も自分に合っていると感じたのが、「ロープアクセス工法」を使った仕事だったんです。これはまさに天職だ、って思うほどどんどん魅了されました。

ロープアクセス工法、というのは、どういった技術なのでしょう。

ロープを使って難所・高所を移動する技

術です。上下だけでなく、左右や水平方向も組み合わせた複雑な移動を安全・迅速・確実にアクセスする技術として注目されています。ロープで体を支え、清掃・点検・補修・塗装・溶接などの様々な作業を行うんですよ。当社は、このロープアクセス工法を使って、高層ビルなどの外壁打診調査やガラス清掃を手掛けています。

——ビルの壁面にロープでぶら下がって作業されている様子を見たことがあります。でも、ガラス清掃ならゴンドラに作業員が乗って作業する様子、外壁に関しては足場を組んで作業する方々のほうがよく見かけます。

おっしゃる通り、足場を組み、またはゴンドラを使用して作業するのが一般的ななんです。ただ、たとえば足場を組むとそれだけでコストが高まります。ロープアクセス工法を採用すれば、ほぼ作業費のみで実施できるためコストを削減できますし、スピーディーに作業を進められるというメリットもあります。

——高所恐怖症では絶対に務まらないお仕事ですね（笑）。

そうですね（笑）。私も高さ150メートルのビルや、40階建てのマンションで作業することがありますが、10階を超えるともう感覚が麻痺して何階でも同じです。想像を絶する世界が眼下に広がっているのですね。工法の習得については、やはり難しいのでしょうか。

ライセンスが必要です。ただ、国内で作業に当たる分には、講習を1回受けることで取得できるライセンスでよく、あとは経験が重要ですね。国際ライセンスを取得するととなると難関です。私は、これから国際ライセンスの試験を受験する予定です。

——国際ライセンスを取得できれば、海外での活動も可能になり、活躍の場が広がるでしょうね。経験が重要とのことですが、社長は独立以前にどこかへお勤めになさったんです。

二社で経験を積みました。一社目はビルの管理やメンテナンス、清掃業を手掛ける会社で、二社目は『外壁打診調査協会』を設立した会社からお声をかけていただき移りました。外壁打診調査と言っても聞き慣れないかもしれませんが、タイルなどの外壁材を使用した外壁の状態やその塗装面、下地の浮きといった劣化を調査し、安全性を診断する仕事です。ロープで降下しながら打診棒を使って外壁を叩いたり、打診棒を転がしたりして音などで判別しながら調査するんですよ。

——それは地道な作業ですね。

ええ。最近では、ロボットが調査する様子メディアで見ることがありますが、ロボットが作業員の代わりを務めるにはまだまだ技術や正確性が足りません。ドローンを使用し、表面の温度差を赤外線サーモグラフィによって測定する方法も出てきていますが、下地の浮きは判断できません。まだまだ、人の手が必要とする分野です。それも、作業員の技量によって調査の精度が左右されるので、信頼できる会社や作業員を見極めることも大事でしょう。

——正確な調査・診断が行われず外壁が崩れ落ちるようなことがあれば大事故につながりますからね。

ええ。実は、ロープアクセスの技術には長けていても打診調査の知識・経験に乏しい人もいるのが現状です。ただロープで作業できれば務まる仕事ではないのですが、

残念ながら外壁打診調査のノウハウを十分に持たないまま作業を行う会社も存在し、後々問題が起きるケースもあるんです。その点、「人材の能力」「品質」との考えから、上級外壁打診調査士の資格を所有する私が現場責任者を務めていますから、安心してご依頼いただきたいですね。

——その確かな技術が今後も信頼を得るでしょう。今後については、どのようにお考えですか。

ありがたいことに、2018年に当社を設立して以来、営業活動はしていませんが、忙しなく頼りに依頼をいただいています。外壁材の落下事故などを未然に防ぐため、10年に1度外壁打診調査を実施する義務が法律で定められているので、依頼は溢れているのですが、人材が足りないんです。当社が率先して手掛けられるよう、ゆくゆくは都内に拠点を構えたい。この業界に貢献していきたいからです。

pick up the story

▼あらゆる分野でAI化が進む現代。外壁調査でも、近年はロボットやドローンを使って作業を行う機会が増えている。しかし、まだまだ人間には及ばない。滝社長は、同業の経営者と手を組み、この状況を進展させるべく動き出しているという。たとえば、AIは「情報処理」「計算」「記憶」といった分野を得意としているため、正確なデータ管理にAIを活用するのも有効だ。実際の調査は人が打診棒を用いて行う必要があっても、データの整理はAIの得意分野だ。AIと人が、それぞれの得手不得手をカバーし合い、また適材適所で能力を発揮することで革新を起こせる。願いは、技術の向上と業界の発展——社長はそうして業界の進化を後押ししていく。



「毎日が充実している」と話す表情が仕事のやり甲斐を物語っています

after the interview : 志垣 太郎

「外壁打診調査士として豊富な経験と知識をお持ちの滝社長。多くの依頼が舞い込む今、なかなか休む間もないほどにお忙しいようですが、『独立して良かった。楽しくて、毎日が充実しています』と話されました。そのお顔は生き生きとしていましたよ。お客様や取引先にも恵まれたそうで、それも社長の誠実な仕事ぶりが引き寄せたのでしょう。今後はスタッフを募集されるそうで、良いご縁があることを願っています」